

死者のいる風景 キューバのシマロン

越川 芳明

いつものように、サンティアゴのバスターミナルのあるカジェ・クワトロからカミオネッタに乗り、エル・コブレに向かう。

エル・コブレには、ラ・ビルヘン・デ・ラ・カリダー（慈愛の聖母）と呼ばれる、褐色のマリア様が祀られたカトリック教会がある。

ながらくこの混血ムラートの肌色を持つ聖母は、ヴァチカンには認められなかったが、一九一六年になってようやくローマ法王、ベネディクト十五世によってキューバの守護神として認定された。

教会の祭壇の裏手の部屋には、信者たちが持ち寄った、聖母への感謝の手紙やら写真やらに混じって、オリンピックのメダルや、キューバ野球の優勝記念のボールやユニフォーム、戦士の勲章なども飾られている。ヘミングウェイが寄贈したノーベル賞の記念メダルも飾ってあったが、いまはない。

毎年、九月八日（聖母の祭日）には、キューバ全土から聖母による「奇跡」に感謝する人々が訪れる。黄色い服をまとった女性や、ひまわりで作った花飾りを持った人々でごった返す。キューバ人であれば、一度は訪れたいと思う巡礼の地だ。

なぜ黄色なのだろうか？

アフリカ伝来の信仰（サンテリアともルクミとも呼ばれる）の守護霊の一人で、オチュンという女神のシンボルカラーが黄色だからだ。オチュンは、女性たちに関心の高い結婚や出産や黄金（お金）を司ることで知られる。アフリカ人にとっては、来世などのことより、近い将来のご利益が重要で、そうした発想は非常に現実的だ。

メキシコでは褐色の「グアダルーペの聖母」が大勢のメスティソ（ヨーロッパ人とインディオの混血）たちをカトリック教会に誘い込んだように、キューバのカトリック教会は、アフリカ奴隷たちの崇める女神の一人（オチュン）と、聖母マリアを重ね合わせて、彼らをキリスト教に改宗させようとした。そうした「習合」による、アフリカ奴隷の囲い込みの試みは、半ば成功していると言えるし、失敗しているとも言える。

ぎゅうぎゅう詰め乗り合いタクシーは、目的地までほとんどノンストップで走る。三月でも、昼は摂氏二十度を超えるが、車にエアコンなどはなく、窓も開閉のハンドルが壊れていて閉めきったままだ。次第に額に汗を掻いてくる。

三人掛けの真ん中に座ると、エロチックな香水の匂いをさせた肌の色の黒い中年女性の太腿が両側から迫ってくる。雌牛のような、どんと突き出たお尻についている太腿が、である。ここで香水の誘惑などに負けて、少しでも自分の脚のスペースを確保しておかないと、まるで宿題をさぼって先生に叱られている小学生みたいに、三十分以上も両膝を合せたまま座っていなければならなくなる。

途中で降りる客はいない。それもそのはず、カミオンと呼ばれる大型のトラックならば五ペソだが、全員が座れる小型のカミオネッタは二倍もするからだ。グアグア（一般のバス）は二十セントボと、リーズナブルな価格だが、めったにやっこないの、人々はいきおい民営の乗り合いタクシーに頼ることになる。

往復で二十ペソ（八十円）なんて大した額じゃないか、と思うかもしれないが、平均給与が三千円ぐらだから、一回往復するだけで、給与の二・六パーセントを消費してしまう計算だ。

それがどれほど高いか。たとえば、日本で二十万円の給与をもらっている人が、いま同じ割合の料金を払うとしたら、なんと五千二百円になってしまう。

また、配給以外の商品は、CUC（セウセ）sと呼ばれる兌換ペソ（ペソの二十五倍）で買わねばならないので、給料以外の収入が不可欠だ。そのため、誰もが副収入の確保にあくせくする。パラドールと呼ばれる食堂を開くか、カサ・パルティクラルと呼ばれる観光客相手の民宿をやるか、あるいは、二〇一二年の大幅な法律改正で自営業が解禁になって、家の店先で、海賊版のDVDやCDを売ったり、どこかで仕入れてきた女性服やサンダルを売ったり、文房具や洗濯ばさみなどの小物を売ったりする。

そうした機会に恵まれない者は、しかたなく闇市で稼ぐ。葉巻きやラム酒の製造工場で働く者は、巧みに商品を持ち帰り、観光客に道ばたで売りつける。レストランで働く者は材料の肉をごまかして、誰かに売りつける。若い女性は観光客相手に売春をする。下級公務員は、依頼人からワイロを受け取る。タクシー運転手は、メーターをごまかす。そんな風にして、庶民は二重経済の桎梏の中でしたたかに生きる。

東部の港湾都市サンティアゴ・デ・クーバは、一五一五年から一六〇七年までスペイン植民地の首都だったが、いまはキューバ第二位の都市だ。首都ハバナ市に対するライバル意識が強い。カストロの反乱軍が最初に抵抗の狼煙を上げたのも、ここサンティアゴだった。

いまそうした「反権力」の名残があるとすれば、地元のプロ野球チームがハバナ市の「インドウストリアレス」と戦う試合ぐらいだろうか。人々はホーンやサイレンをけたたましく鳴らして応援する。内野の立ち見席では、地元チームの攻撃が始まると、私設楽団の音楽に合わせて野球そっちのけで踊りまくり、まるで開放的な野外ディスコのような。入場料は三ペソだから、庶民には最高の娯楽である。

エル・コブレは、サンティアゴから二十キロほど内陸に入った静かな町だ。その名の示す通り、この山には銅（コブレ）が埋まっていた。十九世紀の後半に奴隷制が廃止されるまで、中央アフリカやハイチ経由で連れてこられた黒人奴隷たちが鉱夫として働かされていた。

わたしは ここの者じゃない
ハイチからやってきた
七つの海をわたって
ここにたどり着いた

わたしは ここの者じゃない
ハイチからやってきた
アフリカ人
コンゴ ルクミ

わたしは ルクミ
ハイチからやってきた
七つの海をわたって
ここにたどり着いた

コンゴ ギニアのコンゴ
コンゴ ギニアからやってきた

これはアフリカ伝来の信仰（バンツー系のパロ・モンテ）の憑依儀礼（ベンベイ）で歌われる歌の一つだが、彼らの出自をきちんと記録している。コンゴとは、ギニア出身のバンツー語を話す人たちのことで、ルクミとは、いまのナイジェリアあたりから連れてこられたヨルバ語を話す人たちのことだ。おそらく十九世紀初頭の独立革命の際に、フランス領ハイチからキューバに逃げてきた白人の主人が連れてきたのだろう。その証拠に、いまでもパトワ（フレンチ・クレオール）を喋る黒人たちがサンティアゴやエル・コブレに少なからずいるし、パトワによる儀礼の歌もある。

アフリカ奴隷たちは反乱を起こすたびにスペイン人総督下の軍によって鎮圧された。それでも気位の高い奴隷たちは、パレンケと呼ばれる避難地へ逃げた。逃亡奴隷は、フランス語圏ではマルーンと呼ばれるが、スペイン語圏ではシマロンと呼ばれる。

いまでもベンベイで、奴隷時代から黒人たちが歌い継いできたシマロンを称える歌を聴くことができる。

(祈りの歌)

あたしには 黒人の夫 (ネグリト) がいた

それは ネグロ・シマロン

あたしには 黒人の夫 (ネグリト) がいた

それは ネグロ・シマロン

(コーラス)

ネグロ・シマロン パレンケに行った

ネグロ・シマロン ケンケ・ブケンケ

ネグロ・シマロン パレンケに行った

あそこに 彼のンガンガがある

ケンケ・ブケンケ

儀式では、ソロの歌い手が先導して、集まった者たちが同じ歌詞をくり返す、いわゆる「カノン形式」をとる。歌詞だけを見ると、単純に思えるかもしれないが、歌い手がいろいろと抑揚をつけたり、歌詞を引き延ばしたり、アドリブで新しい歌詞を付け加えたりするし、またジャズのようにコーラスの者たちと即興のやり取りをするので、音楽として実に多彩で、変化に富む。

この「ネグロ・シマロン」の歌のように、太鼓や鉦の音に合わせて素朴な歌詞を何度も繰り返して、十五分、二十分と歌いつづけ踊りつづけているうちに、場に熱が帯びてくる。ラム酒や葉巻きの助けもあり、精霊や死者の霊に憑依される人が出てくる。

憑依される人は「馬」と称され、精霊や死者の霊が「馬」に乗っかると、「馬」はいきなり半覚醒状態になり、乗った精霊や死者の霊にふさわしい踊りを始める。パロ・モンテのベンベイや、サンテリアのタンボール（太鼓儀礼）などの憑依儀礼ほど、死者を身近に感じられるものはない。

野球場での娯楽としての踊りとは違い、こちらの憑依の踊りは、貧困や難行苦行を強いられたディアスポラの民にたんに精神的な開放感を与えるだけでなく、いまある自分の生を先祖（死者）のそれと結びつけて、自分を取り巻く世界を意味あるものにしてくれるものだ。こうした儀礼をおこなうたびに、奴隷の地位におとしめられている人たちは、自尊心を取り戻す。ベンベイの歌には、テキストなどはなく、すべて口承伝達である。歌は支配的なメディア（ペン、本、教育）を奪われた人々にとって、すぐれて貴重な記憶装置なのだ。

この歌の中にある「ンガンガ」というのは、パロ・モンテにおける神聖な「容器」のこ

とで、その中にさまざまなパロ（木）、鉄道線路の一部、鳥の羽根、鱔の歯、動物の骨など、二十一種類の異なる要素が入っている。自然界の全パワーがその中に凝縮していて、祭司はそこから死者の霊や、精霊を呼び出す。

パレンケは、ブラジルでは「キロンボス」と呼ばれ、ベネズエラでは「クンベス」と呼ばれるが、かつてキューバのあちこちに存在した。そのうち有名なのは、東部ピナル・デル・リオ県のビニャレスの近くにあるサンミゲールの洞窟の、その名も「シマロンのパレンケ」である。

規模も大小さまざまだった。セバスチャンという名のハバナ出身のシマロンに率いられた「モア」というパレンケや、「エル・フリホル（インゲン豆）」と呼ばれる大きなパレンケには三百人以上の逃亡奴隷が暮らしていた。

奴隷にとって、パレンケこそが白人主人の所有権から逃れ、サトウキビ畑の農場監督の容赦ない鞭から逃れることができる避難地であった。さらに言えば、奴隷商人とスペイン人統治者によって奪われた人権と自由を確保できる「聖地（アジュール）」だった。

十九世紀前半には、東部で奴隷による大きな反乱が何度かあった。とりわけ、「コバ」というあだ名を持つベントウーラ・サンチェスや、「ガジョ（雄鶏）」というあだ名を持つマヌエル・ガリニャンなど、カリスマ的な指導者に導かれた反乱が相ついで起こった。彼らはアフロ信仰の司祭（ババラオ、サンテロ）であり、中には強烈な個性を持つ女性司祭（サンテラ）もおり、みな憑依儀礼を取り仕切ることで指導力を発揮した。そのため、一八一六年に、エスクデロ総督はパレンケを絶滅させる計画をスペインの王室に上申しさせた。

エル・コブレでは、ロマ・デ・チボ（山羊の丘）にパレンケがあった。その山は、町からも見えて、教会からそれほど離れていない。パレンケのシマロンと銅山の奴隷鋳夫たちのあいだでは、容易にコミュニケーションが通じて、キューバでいち早く反乱を起こしたのも彼らである。だから、スペイン人たちがこんな僻地に立派なカトリック教会を建てたのも、そうした不穏な動きを沈静化するという意図があったのかもしれない。

現在、「山羊の丘」の右手にあるロマ・シマロン（シマロンの丘）の頂上には、逃亡奴隷の誇り高い反乱を記念して、巨大なシマロンの記念碑が屹立している。一九九七年に、キューバを代表する芸術家の一人、アルベルト・レスカイによって造られたものだ。

このシマロン像は喻えようもないほど異様な強靱さを備えている。基底部分は、大地を思わせるお椀型の鉄板で、その上に、なんと摩訶不思議な銅像が乗っかっている。空に向かって片腕が伸びていて、手先がくの字型に曲っている。腕の下には、鳥の片羽のようなものが付いている。人間と鳥の合体した形姿だろうか。

お椀型の基底部分に登ってみると、遙かの別の丘の上に建つカトリック教会が見える。かつてシマロンたちは、あの白人たちの偉容を誇る教会の建物をどのような目で眺めた

ことだろう。

アフリカ伝来の信仰とヨーロッパの降霊術が習合した信仰（エスピリツアリスモ）の祭壇には、キリストや聖徒たちの絵や像が飾られていて、アフリカ奴隷の末裔たちがキリスト教に改宗したかのように見える。

だが、それは、ながい弾圧や迫害の末に、ディアスポラの民が学んだ妥協の産物なのかもしれない。あるいは、もっとポジティブに言えば、「偽装」や「擬態」の知恵なのかもしれない。

それというのも、彼らは多神教を捨てていないからだ。たとえば、カトリック教の聖女バルバラの絵や像のまわりには、チャンゴ（聖女バルバラと習合しているアフリカの守護霊）の好みだというビールや山羊の肉、コーヒー、煙草などが飾られている。そのように、キリスト教はアフリカ伝来の信仰によって囲い込まれているのだ。

きみの数ある魅力のなかで
ぼくは 微笑みを選ぶ
微笑みで きみは内に燃えている
炎を隠すからだ¹

私を乗せたカミオネッタは、スピードメーターがゼロを差したまま、猛スピードで緑色の田園地帯の街道を走り抜け、三十分ほどでエル・コブレの広場に着いた。隣に座っていた雌牛のおばさんたちは、少し手前のグリージョ地区で降りていった。

カミオネッタを降りると、近くの店で、サトウキビの焼酎（アグアルディエンテ）のお土産を買い、アフリカン・ダンサーのエスペランサの家に向かう。

すると、二年間も会わなかった友人のホルヘが映画館の角から姿を現わした。コーヒー色の肌をして、バスケットボール選手のように長身のホルヘは、私が初めてエル・コブレに行った日に、ベンベイに誘ってくれたのだった。シマロンの記念碑の存在を教えてくれたのも彼だった。噂では、税金を払わなかったので、刑務所に入れられたということだった。

互いに再会を祝す言葉とハグを交わすと、ホルヘが私を喜ばすようなことを囁いた。「今夜、エル・パホンっていうところでベンベイがあるよ。ちょっと遠いけど」

私は言った。「絶対に行きたい。でも、どのくらい遠い？」

「三時間ぐらいかな、歩いて。山を二つ越えていく」

「さすがにシマロンは健脚だね。でも、今夜は、私もシマロンになるよ」

ホルヘがいつもの柔和な笑みを浮かべて言った。「あなたはすでに立派なシマロンですよ」

注

¹ ニコラス・ギジェン「アナ・マリア」(『愛の詩』1964年所収)